

国語

注意

- 1 問題は **1** から **5** までで、17 ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は五〇分で、終わりは午前九時五〇分です。
- 3 声を出して読んではいけません。
- 4 答えは全て解答用紙にHB又はBの鉛筆(シャープペンシルも可)を使って明確に記入し、解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 答えは特別の指示のあるもののほかは、各問のア・イ・ウ・エのうちから、最も適切なものをそれぞれ一つずつ選んで、その記号を書きなさい。また、答えに字数制限がある場合には、や・や「などもそれぞれ一字と数えなさい。
- 6 答えは解答用紙の決められた欄からはみ出さないように書きなさい。
- 7 答えを直すときは、きれいに消してから、消しくずを残さないようにして、新しい答えを書きなさい。
- 8 受検番号を解答用紙の決められた欄に書き、その数字の○の中を正確に塗りつぶしなさい。
- 9 解答用紙は、汚したり、折り曲げたりしてはいけません。

1

次の各文の——を付けた漢字の読みがなを書け。

- (1) 人工知能の普及は仕事の効率化に拍車<sup>ハクシャ</sup>を掛ける。
- (2) 喉元<sup>ノドノヘ</sup>過ぎれば熱さを忘れる。
- (3) 無理な計画は砂上の楼閣<sup>ロウカク</sup>に等しい。
- (4) 次の大会で勝利するのは必定<sup>ヒツメイ</sup>だ。
- (5) まるで幻灯<sup>カントウ</sup>を見ているかのような風景だ。

2

次の各文の——を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書<sup>カイク</sup>で書け。

- (1) 候補者がヒョウデン<sup>ヒョウデン</sup>となる地域で演説する。
- (2) 年の初めに家内安全とガン<sup>ガン</sup>をかける。
- (3) キャプテンの一言がチームをササ<sup>ササ</sup>えた。
- (4) 役員に事後処理をイニン<sup>イニン</sup>する。
- (5) 文集の原稿を印刷所でセイハン<sup>セイハン</sup>する。

## 3

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。( \*印の付いている言葉には、本文のあとに「注」がある。)

朝の庭で蟬が鳴いている。鳴き始めは去年よりも早かった。

「これ、ベビーパウダーみたいね。」

「お母さんは片栗粉かと思った。」

\*卵色の少女と母親が、透明な、チャック付きの小さいポリ袋に詰められている塩を、左右から見詰め合っている。沖縄に出張している母親のすぐ上の兄が、近くの島の産物だと言って送ってきた。

袋の中の塩は、こまかい結晶ではなく、真白な粉状で、毎日スプーンといわず、指先にも塩を当てている母親は、これでもお塩なのかと目に力を入れた。母親は言った。

「雪塩って名前がついている。沖縄の周辺には鳥がたくさんあって、珊瑚礁で出来た島もあるのね。兄さんに聞いた説明では、珊瑚にしみとおった地下の海水を原料にしているので、私達のからだに大切なミネラルがいつばいふくまれているんですって。」

少女は、両手の指先で、ふくらんでいる袋のあちこちをつまんだ。母親には、いかにも湿気を呼び易い、優美な自然塩だと思われた。

この母親には、二人の兄がいたが、少女は雪塩を送ってくれたこの下の伯父さんが好きだった。突然、

「豚の卵と馬の角。」

と言って、

「分る？」

と聞いたり、変に着飾っている女のひとを見て、

「ああいうのを、耳朶に口紅をつけているような人って言うんだよ。」

などと真面目な顔をして言う。そういうところが気に入っている。未

だに結婚していない。仕事柄、会社からはよく出張するし、自分も地球の上を出来るだけたくさん動いてみたいので、家族はいないほうがいいというのがおじさんの考えらしいと少女は思っている。

そういえば、おじさんからの塩は、今度が初めてではなかった。二三年前だったが、その頃のおじさんの勤務地は北海道で、オホーツクの海水一〇〇パーセントという、やはり今度と同じくらしいの小袋に入った焼塩が送られてきた。

「この塩を毎日食べて、女のひとはもっと美しくなつて下さい。」

と書き添えてあった。この時の塩も、母親には結晶のこまやかさは見慣れたものと違っていたが、焼塩だったせいか、今度の雪塩のようにはおどろかなかつた。

今年の夏休みは、そのおじさんが沖縄から休みをとって帰ってくるといので、少女は、友達の誘いも断つたし、うちに誘うこともしなかつた。学校の図書館だけでなく、住んでいる町の図書館にも出掛けて行って、沖縄の自然や日常生活に関するものを、一冊でも多く見たり読んだりして、おじさんがどんなところで毎日を過ごしているのか知りたいと思った。図鑑や図録の類は、ただ見ているだけで分ることもいろいろあるけれど、文章になると、すぐには分らない説明が次々に押し寄せてきて、言葉の意味を調べるのに横道に逸れる場合が少なくなかつた。それに、意味が分ればまだいいほうで、堂々巡りしながら自分はいったい何を調べていたのか分らなくなるようなことさえあった。沖縄を知りたい気持とおじさんを知りたい気持がひとつになつていて、真夏日の連続にもくじけず、少女は大きな麦藁帽子をかぶって図書館に通つた。

おじさんから、急に都合で島を離れられなくなつたという葉書が母親に届いた時、少女の夏休みもあと数日になつていた。

「あのひとは、いつもこうなんだから。」

と母親は少女に聞こえよがしにつぶやいて、娘の落胆らくたんに先回りした。

「その代わりにいい物を送ります、って書いてあるけれど、まさか今度も塩じゃないでしょうね。」

母親は娘の顔を見ないままで続けた。

「あんなに一所懸命調べて待っていたのに。」

それを言いたいののはわたしなのに、と少女は思い、いいわ、この次がもつとたのしみになる、そうも思つて口は開かなかつた。

葉書から二日後、沖繩からの航空便でマンゴーが届いた。三個並んで

いる。「家族三人、一人一個ずつ、のつもりかしら。」

母親はそう言つて縦長の球形の果実が、ざくろの皮の色に近く濃い紅こに熟れているのを取り、顔を寄せた。強い香りかおが南国だつた。少女は、いつか友達の誕生祝いっせいに招かれた時、フルーツサラダの中にまじつて淡い橙だいだいいろ色の果肉をマンゴーだと教えられたことはあつたが、近くでこうして丸ごと目のあたりにするのは初めてだつた。少女の父親はいつたいに果物の類を好まず、妻や娘にはすすめるものの、自分ときたら和菓子わがし一辺倒いっぺんちやうであつた。いきおい、母親もマンゴーを丸ごと買うようなことはなかつた。

父親の勤めからの帰りを待ち、夜食の後、母親は報告のつもりで冷やしたマンゴーを皮つきのまま縦に三つに切り、大皿に一つずつ盛つてそれぞれの前に置いた。大き目のスプーンを添えた。種が固くて自分の力ではとても割れないので、平たい種がついたままの果肉の部分は自分が取り、父親と少女には種なしの果肉をつけた。皮の外からはうかがいようもなかつた甘い芳香ほうかうが漂ただよつた。

父親は、手をつけないのは悪いと思つたのか、まっ先にスプーンを

取つて、柔らかな橙色の果肉に当てた。

三人三様の沈黙えんもくの動きが続いた。

少女は、薔薇ばらの花のエキスとアイスクリームが口の中で溶け合っているような気がした。後味のきれいな甘みが、南の海の深い色と空の輝きを呼んで、あの島に行けば、海と空を見ながら毎日おじさんとこの果物が食べられるのかと思うと、浮き立つようだつた。

「西瓜すいかでもない。メロンでもない……。」

父親はひとりごとを言いながらほんの二口三口だけで、残りのマンゴーの皿を少女の方へ押しやつた。

母親は、

「何でも新しいうちがいいの。兄さん、本当にいい物を送つてくれたわ。」

と、唇くちびるの回りの果汁かじゅうを片方の手の指先で拭き拭き、せわしくスプーンを口に運んだ。

洗い場に少女と一緒に皿を下げた。

長年炊事すいじをしてきたが、梅干うめぼしの種をわざわざ水で洗つたことはない。桃ももの種を洗つたこともない。それなのにどういふわけか。母親は皿に残っているマンゴーの種をそのまま捨てる気にならず、蛇口じょうこうの下で洗ひ始めていた。洗ひながら、美味おいしさのあまり種にまで執着しよくちやくしているのかという恥はにかみもなくなつたが、洗ひ続けているうちに、<sup>(4)</sup>おや、から、あら、に交まつて、水を止めると掌てのひらの内側にのせたままじつと見入つた。

種の全長は八、九センチメートル、幅は五、六センチメートル、いちばん厚いところのふくらみは二センチメートルか、せいぜい二・五センチメートルくらいで、扁平へんぺいな楕円形だえんけいの生糸色なまきいとの種には、表面に数本、抉えぐられたような凹凸くぼみの縞目しまめが走っている。その上、楕円形を横にして見た

時の上側の縁には、白髪を逆立てたような毛立ちがあり、下側の縁にも少量の毛立ちがある。これがマンゴーなの？とわが目を疑いながら、母親はその種を、模様のない若草色の皿の中に置いた。

次の日、種は乾いていた。ただ毛立ちの部分には、乾燥で弾力性が加わった。高さは一〇メートルもあって、厚い葉をつけるといふマンゴーのあの美味しい果肉が、しんにこういうものを抱えているのかと思うと、娘に見せておきたくなった。娘を呼んだ。

若草色の皿の中を見るなり、あの卵色の少女は言った。

<sup>(5)</sup>「海のお魚が木になっている。」

「……………」

母親はすぐには反応できなかった。言われてみれば、全体マンボウ形の魚で、上下の縁の毛立ちは背鰭と腹鰭に見えなくもない。いや、シッポを落とされた皮剥きか。

海の魚が木に？

母親は少女の迷いのない言葉に不意をつかれたが、まさか、と思い、そのうちに、もしかすると、などと思いはじめていた。

少女は、今夜はおじさんにマンゴーのお札の手紙を書こうと思っ  
てい  
る。お札だけでなく、<sup>(6)</sup>前々から教えてもらいたかったことも書こうと思  
う。今日も又庭で鳴いていた蟬が、蝶でも蜻蛉でも人間でもなくて、  
蟬で生きているふしぎについて。そしてこのわたしが、マンゴーではな  
く、花でも鳥でも魚でもなかったふしぎについても。あのおじさんな  
ら、きつとやさしく教えてくれると思う。

（竹西寛子「木になった魚」による）

〔注〕卵色の少女——小学生で、この場面の前に卵色の服を着て登場し  
ている。

生糸——蚕のまゆから取った繊維を合わせて作った糸。  
皮剥き——カワハギ科の海魚。

(1)

〔問一〕友達の誘いも断つたし、うちに誘うこともしなかった。とある  
が、それはなぜか。その理由を述べたものとして、最も適切なもの  
を次のうちより選べ。

ア 個性的なおじさんではあるが、なぜ二回も塩を送ってくるのか、なぜ  
いつも真面目なことだけを言っているのか、それをもっと調べてみた  
かったから。

イ 独身で気まま、ユーモアのある会話もできるおじさんはあこがれでも  
あり、そのおじさんが夏休みに帰って来るので、その言葉づかいについ  
て調べたかったから。

ウ 大好きなおじさんが夏休みに帰ってくる予定なので、おじさんが仕事  
をしている沖繩について調べることで、おじさんをより深く理解した  
かったから。

エ 沖繩の自然や日常生活に関することを調べることで、自分の学習に対  
する意欲を大好きなおじさんに認めてもらい、おじさんの関心を引き  
きたかったから。

〔問2〕 娘の落胆うたげに先回りした。とあるが、母親はなぜそうしたのか。その理由を述べたものとして、最も適切なものを次のうちより選べ。

ア 沖繩の自然や日常生活についてよく調べてはいたものの、分からないことも多く、娘ががっかりしているのを感じ、なんとかして励ましてあげたかったから。

イ 夏休みもあと数日になり、図書館通いもできなくなって、おじさんのことを調べる時間がなくなっていくことに気落ちしている娘を元氣付けたかったから。

ウ おじさんが来られないことを知った娘が落ち込む前に、「その代わりにいい物を送ります。」という葉書のおじさんの言葉を伝えることで、喜ばそうとしたから。

エ 図書館に通い沖繩のいろいろなことを調べておじさんを待っていた娘が失望することを、おじさんの悪口を先に言うことで、少しでもやわらげようとしたから。

〔問3〕<sup>(3)</sup> 父親はひとりごとを言いながらほんの二口三口だけで、残りのマ

ンゴの皿を少女の方へ押しやった。とあるが、その時の父親の気持ちを説明したものとして、最も適切なものを次のうちより選べ。

ア 真つ先にスプーンを取ってはみたものの、種なしの果肉であったため、少しでも種のある西瓜やメロンを食べたくなり、娘に食べて欲しいという気持ち。

イ おじさんが送ってくれたマンゴーを、全く口にしないのは申し訳ないとは思ったが、やはり自分の口にあわないため、娘に食べて欲しいという気持ち。

ウ 初めて口にする果物にしては西瓜やメロンより美味に感じたが、隣で娘がいかにもおおいしそうに食べている姿を見て、娘に食べて欲しいという気持ち。

エ 強い香りが南国を想起させるマンゴーは沖繩のイメージとよく合っているが、マンゴー独特の甘い香りが気になり、娘に食べて欲しいという気持ち。

〔問4〕<sup>(4)</sup> おや、から、あら、に<sup>かわ</sup>変って、とあるが、それはどういふことか。最も適切なものを次のうちより選べ。

ア マンゴーの味があまりにおいしかったために、つい種までいとおしくなつて洗ってしまったが、種がきれいになつていくうちに、そのおいしさの秘密が分かつたような気がしたということ。

イ 初めて食べたマンゴーの種は梅干しの種とは違つてめずらしいので、洗つて皿に取つておこうとしたが、種にまで強く引かれてゐる自分は欲張りで恥ずかしいと感じてしまつたということ。

ウ 何でも新しいものはよくてマンゴーの味も印象も新鮮だと感じたが、種を洗いながら観察したときに、無地の皿の上に置いたらこの種の特徴もよく分かるのではないかと考えたということ。

エ 最初はマンゴーの種が普通の果物の種とは違ふことに気づいたが、その種を洗つて見ているうちに、だんだんと種の細かい部分が気になつて、改めて不思議な形状の種だと思つたということ。

〔問5〕<sup>(5)</sup> 「海のお魚が木になつてゐる。」とあるが、そのように感じたのはなぜか。その理由を述べたものとして、最も適切なものを次のうちより選べ。

ア おじさんが送つてきた果物の種は、普通の種を超えた形状を持ち、凹凸の縞目が魚と木肌の色に似ていたから。

イ 楕円形の種を横にして見たときの上側の縁には白い毛立ちがあり、これが魚と厚い緑の葉をつけたマンゴーの木を想起させたから。

ウ 魚の形に似たマンゴーの種が、葉の緑色に似た若草色の皿の上に置かれたのを、葉を背にして魚がいてと見たから。

エ マンゴーの種は、マンボウやシツポを落とされた皮剥ぎにも見えるため、それを縦に置くと小さな木のように見えたから。

〔問6〕<sup>(6)</sup> 前々から教えてもらひたかつたこととはどのようなことか。最も適切なものを次のうちより選べ。

ア 自分の存在について

イ 人間と生物の違いについて

ウ 人生の意義について

エ 昆虫<sup>こんちゆう</sup>の実態について

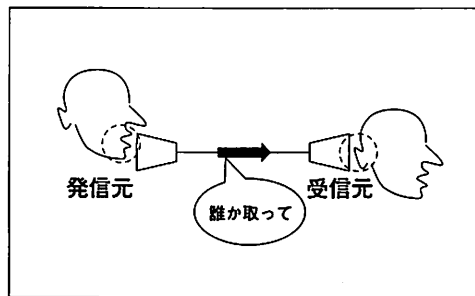
## 4

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。( \* 印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。)

言葉は、聴覚的、視覚的、そして点字のように触覚的に表現されます。私たちは、言葉を使うことによって、例えば自分の意思を相手に伝えることができます。私がりんこの皮をむいているときに電話が鳴り「誰か取って」と言い、あなたが電話に出てくれると、私は「ありがとう、助かった」と言うでしょう。このとき、言葉「誰か取って」を使うことによって、意思「電話に出てほしい」はあなたへ伝わったと言えます。ところで、実体のない「意思」はどのような仕組みで相手へ伝わのでしょうか？ そして、言葉はなぜ意思を伝えることができるのでしょうか？ 言葉とは何かを考えると、どこから（文法から？ 単語の成り立ちから？）、どのように（言語学的に？ 人類学的に？）アプローチすべきかを考えたと、思考は逡巡し、一向に前へ進めなくなりました。であるならば、興味を持った部分を出発点として、まずは考えを進めるのが得策でしょう。私は、「言葉はなぜ意思を伝えることができるのか」という問いを出発点とし、言葉とは何かを考えていくことにします。なぜ言葉とは何かについて考えるのか。それは、私たちは、言葉によって、世界、すなわちモノゴトを表現し、そして、言葉によって、ヒトと相互作用し、そして理解を図るからです。

さて、前述の例において、<sup>(1)</sup> 意思「電話に出てほしい」が伝わる過程は、物理現象である音や光が伝わる過程とは異なるでしょう。例えば、私の口から出る言葉「誰か取って」は、音という物理現象であり、これが伝わる過程とは、発信元である私の口で生じた振動が空気という媒質を振動させ、その媒質の振動が受信元であるあなたの鼓膜を振動させるまでの出来事です。

このように、音に代表される物理現象の伝達系は、発信元と受信元が媒質を介して繋がる「糸電話」です（〔図1〕）。そして、伝達とは、発信元で生じた物理現象が、媒質を介して受信元へ達する過程です。



〔図1〕

一方、意思の伝達系は、糸電話ではありません。意思の伝達過程は、意思の発信者の脳（発信元）が生成した意思に関する活動が、発信元と受信元（受信者の脳）を直接繋ぐ糸のような媒質を介し、受信元へ達する出来事ではないのです。一体、意思はどのように伝達されるのでしょうか。そして、意思の伝達系に含まれる言葉の伝達系は、意思の伝達にどのように関わるのでしょうか。

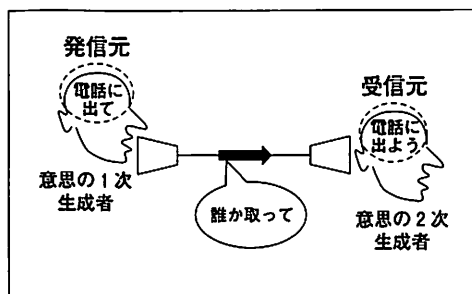
意思の発信者が発する言葉は、その脳内で生じる意思によって生成されるはずですが、例えば、意思「電話に出てほしい」が、言葉「誰か取って」を生成します。そして、その意思の受信元の脳は、「糸電話式」に受け取った言葉「誰か取って」から、意思「電話に出よう」を生成します。

このように、意思の伝達過程において、発信元は「(自発的に生じた)意思が言葉を生成する脳内活動」、受信元は「(受け取った)言葉から(新たな自発的)意思を生成する脳内活動」です（〔図2〕）。

<sup>(2)</sup> ところで、この両者において、一つ気がかりな点があります。それは、「受信元において生成される意思」です。受信元において、意思は発信元から受け取った言葉から「自発的に」生成されます。ある言葉から生成される意思が決まっているならば、それは意思ではなく、機械的な「反応」でしょう。この、受信元における意思の自発性は、「発信者



の発した言葉に込められた意思とは無関係に、少なくとも、それを確認することなどなしに、生成されることを意味します。



【図2】

したがって、意思の伝達過程におけるその発信元と受信元は、改めて、糸電話のような物理現象としての伝達過程の発信元と受信元のような発信・受信の関係にはないのです。意思の発信者は「意思から言葉」を、受信者は「言葉から意思を」生成する者であり、時間的先後関係を考慮すると、前者は「意思の一次生成者」、後者は「意思の二次生成者」と言えます（【図2】）。

以上の考察をまとめると、意思の伝達系では、意思の一次生成者、二次生成者は、それぞれ言葉の発信者、受信者として、（空気のような）媒質を介して繋がっていますが、それらの脳内過程は独立です。そして、一次生成者が意思を生成した言葉に対し、二次生成者がどのような意思を生成するかわからない、ということが、言葉を紹介する意思の伝達系の基本的な特徴です。

意思の伝達系において、二次生成者は、一次生成者から受け取った言葉を基に勝手に意思を作り出します。したがって、一次生成者において生じた意思を反映する意思が、二次生成者において作られた場合、それは「偶然」なのです。私の発する「誰か取って」という言葉によって、あなたが「電話を取る」という意思を作るのは、意外に当たり前ではないのです。

また、一次生成者は、二次生成者がどのような意思を生み出したのかを尋ねはしません。私（一次生成者）の発言「誰か取って」を受け、あ

なた（二次生成者）が電話を取ってくれた際、私は「よかった、「電話に出て欲しい」という私の意思が伝わったのですね」などとあなたに確認しないでしよう。したがって、あなたが「私の意思を反映した意思」を生み出したのかどうかなど、わからないのです。にもかかわらず、「言葉によって意思が伝達される」という言説が広く受け入れられるのはなぜでしょうか？

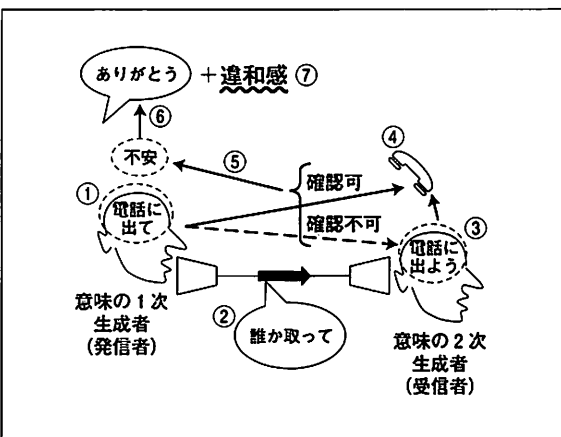
この疑問に対し、読者のみなさんはこう答えるかもしれません。「私たちは、意思の伝達系で現実起こっていることなど知らないままに言葉をやり取りする。だから、そのような疑問などそもそも持たない。現実の言葉のやり取りでは、私が、あなたに意思が伝わったと感じさえすれば、意思が伝わったことになる。だから、「言葉によって意思が伝達された」と素朴に思えるのだ」と。

私は、この回答に半ば賛成ですが、半ば再考を加えたいと思います。賛成の部分は、「私が、あなたに意思が伝わったと感じさえすれば、意思が伝わったことになる」の部分です。私は、あなたが「私の意思を反映した意思」を生み出したのかどうかなどわからないままに「ありがとう」と言うのです。この「ありがとう」は、意思が伝わったと「感じた」から発せられる言葉でしょう。

一方、再考したい部分は「私たちは、意思の伝達系で現実起こっていることなど知らないままに言葉をやり取りする」の部分です。私たちは、意思の伝達系で現実起こっていることを知っているのでないのでしょうか。より正確には、それを「感じつつ」言葉をやり取りしているのではないのでしょうか。すなわち、私たちは、前述のような「ありがとう」を、「相手に意思が伝わったかどうかかわからない不安」を感じながらも、発するのです。

この不安を解消する手立てなどありません。だからこそ、この不安

は、意思が伝わったという無根拠な感覚、「意思の伝達感」へと昇華<sup>しょうか</sup>させられるのではないでしょうか。「ありがとう」という言葉は、感謝の気持ちからだけでなく、この「後付けの意思の伝達感」も加わって発せられる言葉だと思ふのです。

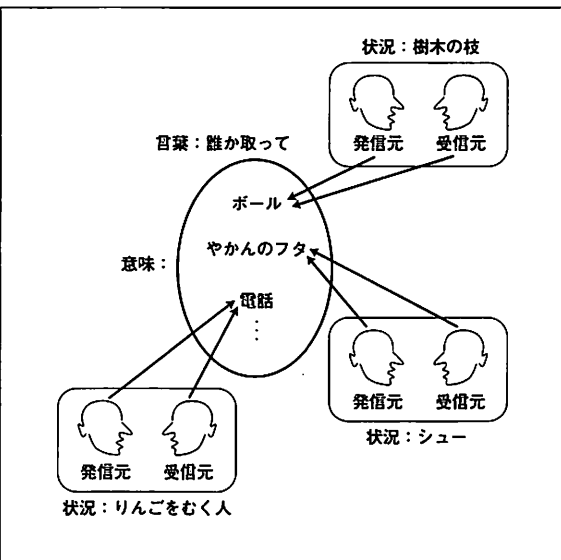


【図3】

言葉による意思の伝達とは、「言葉の受信者がその発信者から発せられた言葉に対し勝手に意思を生み出し、言葉の発信者が勝手に意思の伝達感を作り出す過程」でした。この過程を考察することによって、私たちは、物理的接点を持たない発・受信元の間での伝達機構を知ることができました。

いった媒質によって繋がっている音や光といった物理現象の伝達と異なり、言葉による意思の伝達では、発信者の脳（発信元）は意思から言葉を、受信者の脳（受信元）は受け取った言葉から意思をそれぞれ「創発」し、最後に発信者の脳が「意思の伝達感」をでっちあげるのである。読者のみなさんは、言葉による意思の伝達は、言葉のやり取りの典型例、すなわち「言葉によるコミュニケーション一般のモデル」であることに気づいているでしょう。言葉によるコミュニケーションでは、その発・受信者間で「意思」が伝達されますが、より広くは「意味」が伝達されるといえます。私は、「発信者が意味から言葉を、受信者が受け取った言葉から意味をそれぞれ創発し、最後に発信者が意味の伝達感を取

でっちあげる過程」が言葉によるコミュニケーションであると考えます。このような考えに基づくコミュニケーションを「創発型コミュニケーション」と呼ぶことにします【図3】。



【図4】

一方、それぞれの言葉には（その言葉が）使用される「状況」に応じた幾つかの意味がそもそも備わっているという考えもあるでしょう。例えば、言葉「誰か取って」の意味は、誰かが樹木の枝を指差す状況では「引つ掛かった

ボールを取る」、台所からシューという音が聞こえる状況では「やかんのフタを取る」です。この考えの下では、コミュニケーションとは「発信者が状況に即して意味から言葉を「選択」し、受信者が状況に即して受け取った言葉から意味を「選択」する過程」となります。前述の例は、「りんごをむいている時に電話が鳴るといふ状況」に即して「電話に出てほしい」という意味を持つ言葉「誰か取って」を選び、その言葉を受け取ったあなたは、同じ状況に即し、意味「電話に出よう」を選択する過程です。このような、状況に即した意味の存在を前提とするコミュニケーションを「状況依存型コミュニケーション」と呼ぶことにします【図4】。

状況依存型コミュニケーションと異なり、創発型コミュニケーション<sup>(4)</sup>では、言葉に意味がそもそも備わっているとは見なされません。その過程は、意思の伝達過程と同様です。

まず言葉の発信者において「意味」が自発的に生じ、続いて言葉が創発されます。次に言葉を受け取った受信者において新たな「意味」が創発され、これを契機に（言葉の生成も含めた）行動が生成され、その行動に対し発信者が勝手に「意味の伝達感」を感じるのです。

（森山徹「モノに心はあるのか」による）

[注] 逡巡——ためらうこと。

媒質——力や波動などを他に伝える媒介物。

昇華——物事がさらに高次の状態へ一段と高められること。

[問1] <sup>(1)</sup> 意思「電話に出てほしい」が伝わる過程は、物理現象である音や

光が伝わる過程とは異なるでしょう。とあるが、両者の過程はどのような点で異なるのか。その説明として最も適切なものを次のうちより選べ。

ア 音に代表される物理現象が伝わるのは、振動する空気という媒質が糸電話の糸のように発信元と受信元を直接つなぐからだが、意思の伝達では、発信元と受信元との間を直接媒質がつかないという点。

イ 音に代表される物理現象の伝達では、発信元と受信元の間を直接振動する物質によってつなげるが、意思の伝達では、振動する物質の代わりに言葉が発信元と受信元をつなぐ媒質の役割を果たしているという点。

ウ 音に代表される物理現象は、発信元で生じた振動が一方的に受信元に届けられるのに対し、意思の伝達については、発信元と受信元のヒトが言葉による相互作用をすることによって理解につながるという点。

エ 音に代表される物理現象の伝達過程は、発信元が空気を振動させて受信元の器官を振動させるまでの出来事だが、意思の伝達は、発信元という言葉が受信元の脳内における理解の活動まで手助けをするという点。

〔問2〕<sup>(2)</sup> この両者において、一つ気がかりな点があります。とあるが、筆者が「気がかり」だとするのはどのようなことか。その説明として最も適切なものを次のうちより選べ。

ア 発信者は意思の一次生成者であるため、受信者の側がどのような意思を生成するかにかかわらず、勝手に意思を作り出すという自発性があるということ。

イ 発信者は言葉に意思を込めるが、受信者はその言葉から勝手に意思を生成するので、発信者と受信者のそれぞれの意思が同じになることはないということ。

ウ 発信者が意思を元に発した言葉が受信者に伝わったとき、受信者の脳内では必ずしも発信者の意思を反映した意思が生成されるわけではないということ。

エ 発信者が発した言葉が受信者に伝わったとき、受信者が発信者の意思の通りに言葉の意味を理解しているのは機械的な「反応」にすぎないということ。

〔問3〕<sup>(3)</sup> 「言葉によって意思が伝達される」という言説が広く受け入れられるということについて筆者はどのように考えているか。その説明として最も適切なものを次のうちより選べ。

ア 私たちは、現実には意思の伝達がどのように起きているか分からないので、疑問など感じることはなく、相手に伝わったと感じれば意思の伝達ができていると考えるのは当然のことである。

イ 私たちは、相手に自分の意思が伝わったのかが分からない不安を感じながら言葉のやりとりをしていて、その中で意思が伝わったと自分が感じれば意思の伝達がなされたことにするのである。

ウ 私たちは、実は意思の伝達の過程でどのようなことが起きているかを知っているので、相手の行いに対し「ありがとう」と言うのは、本当に意思が伝わったと感じたから発しているのである。

エ 私たちは、相手が発信者の意思を反映した意思を生み出しているのかは分からないが、そのようなことは気にせず、実際に言葉がやりとりされている以上は意思が伝わったと考えるのである。

〔問4〕 〔図3〕は筆者の言う「創発型コミュニケーション」が成り立つ様子を示したものである。この図中で波線を付けた「違和感」とは、どのようなものか。これについて説明している箇所を本文中から十六字で抜き出せ。

〔問5〕<sup>(4)</sup> 創発型コミュニケーションでは、言葉に意味がそもそも備わっているとは見なされません。とあるが、このことについて説明した次の文の□に入る適切な語句を三十字以内で書け。なお、解答には「発信者」「受信者」という言葉をふくめること。

状況依存型コミュニケーションでは、状況に即して発信者と受信者は、それぞれ意味から言葉、言葉から意味を選択するので、言葉と意味はいくつかのパターンで結びついていると考えられる。創発型コミュニケーションは、□なので、言葉にはもともと意味が備わっているとは考えられない。

〔問6〕 本文を読んだ生徒たちが次のように、意思を伝えることについて話をしている。本文の内容や生徒A～Dの発言をふまえて、相手に自分の意思が伝わるにはどのようなことが大切だと考えるか。あなたが考えることを二百字以内で書け。なお、書き出しや改行の際の空らん、や・や「などもそれぞれ字数に数えよ。

生徒A 言葉でちゃんと意思は伝わると思うよ。だって、僕が言っていること、みんな理解できているでしょ。

生徒B それは、今はね。でも、この間お母さんが「お茶飲みたい。」って言っていたからペットボトルを持って行ったら、温かいお茶を入れてほしかったんだって。

生徒C それに、直接言にくいことを遠回しに言って、相手に分かってもらいたいってこともあるね。分かってもらえるときもあるけど伝わらないこともある。

生徒D でも、一方で「以心伝心」とか、「目と目で通じる」とか言うこともあるよ。どうやって意思が通じているんだらう。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。内は現代語訳である。(＊印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。)

今日のわれわれは、「花鳥風月」という言葉に「華やかさ」や「遊興」のイメージを感じる。しかしこの言葉の由来と考えられている世阿弥(一三六三頃—一四四三年)の「風姿花伝」を読んでいくと、世阿弥に始まり、そこから具象化していく「花鳥風月」は、ワビ、サビ的な暗く静かなものだった。

さらにその具体化としての茶道は、世阿弥も、そこから足利、千家へとつづく教えの中に、華やかでないものに「遊び」の心を観たのだ。(1)その意味での「花鳥風月」が「華やかに」なるには、江戸時代の元禄期(一六八八—一七〇四年)や文化文政期(一八〇四—一八三〇年)での変質を通過するか、もともと「ワビ、サビ」も、いま思われているように古びて枯れたようなものではなかったと考えるほかない。

いずれにせよ「花鳥風月」は、日本人のとらえる「景観」のイメージであり、そこから「鳥」だけをとり出して美を感じるということは、平安時代以降、少なくとも江戸時代中期までなかった。もしそこに美を感じるとしても、「花」と「月」を中心に「鳥」に対してであっただろう。また「月」は、今日の太陽暦のもとでは副次的なものに見なされがちだ。しかし、明治に入って新暦に改暦されるまでは、人々が季節を知るもつとも大きな天文のサインだった。日本の神話でも、天照大神の月に月読命がおかれている。日本だけでなく世界の暦の基本は月齢から計算されており、それが潮汐を決めるため、漁業や航海にとって非常に重要な指摘だった。いいかえれば、月とその周期の関係を知っていることが、季節を知ることだったのだ。

そして、これを「遊興」に転換したのが「風」だろう。「風雅」「風俗

(優雅と世俗の双方)や「風狂」というときの「風」だ。「風」を治めようとするのも日本の文化の特徴で、風神、雷神のもたらす大風や野分を治めることは、世の平和や秋の収穫にとって大事なことであった。

さらに、日本人は自分の周囲の木や虫を、自分と同じ「生き物」として心が通じ合うように感じていたという折口信夫以来の言説は、現代の私たちにまで通じるものがある。古くからのこうした日本人のアニミズムでは、その具体例として「草木虫魚」がしばしばとりあげられ、ここでいう「草木」とは「花鳥」でもあったと言えよう。

もともと「花鳥風月」のイメージは、中国に由来している。たとえば唐代の詩人、杜甫(七一二—七七〇年)の有名な「春望」という漢詩では、次のように歌われている。

国破山河在  
城春草木深  
感時花溅泪  
恨别鸟惊心  
烽火连三月  
家书抵万金  
白头搔更短  
浑欲不胜簪

国破れて山河在り  
城春にして草木深し  
感時に感じては花にも涙を溅ぎ  
別れを恨んでは鳥にも心を驚かす  
烽火三月に連なり  
家書万金に抵たる  
白頭搔けば更に短く  
渾べて簪に勝えざらんと欲す

国都長安の町は、賊軍のためにすっかり破壊され、あとには山と川が昔のままにある。荒れ果てた町にも春がやってきて、草や木が深々と生い茂った。この戦乱のなげかわしい時節を思うと、花を見ても涙が落ち、家族との別れを悲しんでは、鳥の声にも心が痛む思いがする。戦いののろしは三ヶ月もの長い間続いており、家族からの手紙はなかなか来ないので、万金にも値するほど貴重

だ。たび重なる心痛のため、白髪をかけばかくほど短くなり、全く冠をとめ  
るピンもさせなくなりそうである。

(『漢詩鑑賞辞典』による)

ここでの「鳥」は、聖なる予告をする存在、神の言葉を伝達する使者  
である。また、「花鳥の使い」とは、異性への恋情を媒介する意味ももつ。  
こうした中国の鳥についての表象は、日本には奈良時代に異国趣味と  
して入ってきた。それを最もよくあらわしているのは、正倉院の工芸意  
匠にさまざまな鳥の文様が見られることである。そこには、表面を埋  
め尽くすかのように、多数の鳥の文様が繰り返し描かれているものもあ  
り、それによって悪霊の侵入を阻止する意味を表現している。

地球規模で見ると、古代において最も鳥の表象の多いのは古代エジプ  
トであるが、同じ文様は、紀元前三世紀くらいのペルシャや西アジアな  
どの文物にも見られる。それらは、そこからシルクロードを通り、中国  
を経て日本にも伝わったと考えられている。

日本では、当初はそれをそのまま受け入れるが、やがて「日本化」が  
生じる。その典型が平安時代だった。たとえば、西アジアでは鳥を神の  
使者としてオアシス的な理想郷が描かれているが、中国ではそこに自然  
の要素がとりいれられ、美しい鳥や花が描かれるようになった。さらに  
日本には四季があるため、平安時代には四季の移ろいを背景にした「日  
本化」が生じた。

具体的には、清少納言の『枕草子』の第四八段「鳥は」のように、鳥  
は季節に応じてあらわれたり消えたりする、季節の移ろいの象徴として  
とりあげられている。すなわち「咲き散る花、来たり去る鳥」という表  
現のように、ある鳥が来ると新しい季節を感じ、その鳥が去ると季節が

終わる寂しさを感じているのである。ここには、移ろいがゆえに美し  
いという心情がみえ、同時に、季節は循環することによって人間を超  
えた永遠の象徴でもあるという美学が含まれている。

さらに『徒然草』にも次のような文章がある。

「花は盛りに、月は隈なきをのみ、見るものは。雨に對ひて月を恋  
ひ、垂れこめて春の行衛知らぬも、なほ、あはれに情深し。咲きぬべき  
ほどの梢、散り萎れたる庭などこそ、見所多けれ。」

(兼好法師『徒然草』第三百三十七段)

花は、盛りに咲いているのだけを、月は一点のくもりもないのだけを見るも  
のであろうか。雨に向かつて月を恋慕い、簾を垂れた部屋に引きこもって、  
春がどこまで暮れていったのかを知らないのも、やはり、しみじみとした感じ  
がし、情趣の深いものだ。今にも咲いてしまいう頃あいの桜の梢、花の  
散りしおれている庭などこそ、見どころの多いものである。

(『新編古典文学全集』による)

このように季節を待つ、惜しむという日本文化の特色が、「花鳥風月」  
という言葉にあらわれていた。つまり、日本の「風と月」、すなわち四  
季折々の風景を外在化し、「鳥や虫、草花」の全体を「花鳥風月」と見  
なしたのである。

それは今日でも京菓子、京料理、茶席などでよく使われる季節の「見立  
て」(季節をかたどった菓子、料理の盛り付けに、次の季節が訪れる少し  
前に春先なら桜葉、秋先には紅葉をあしらうなど)に近い発想であった。  
日本ではこのように「花鳥」とされるものが、インドやタイなどの東  
南アジアでは、「花獣」が描かれる。この違いはなぜなのか。

日本の暦は、もともと稲作を気候の変化に応じて行うために用いられてきたが、近世以降、上方や江戸で都市生活が始まってからも、稲作の季節感は洗練された形で残り、それは生き物、とくに「花鳥」と深く関わっている。

たとえば「鳥暦」というように、都市の人々もウグイスが鳴くと「春」を感じ、ツバメが軒先に巣をつくと「初夏」を感じる。さらに、シギやチドリがシベリアあたりから干潟に飛来すると「秋」の訪れを感じる。やがてガンの群れが空を飛び、ツルが北から帰ってくると「冬」の到来を感じるようになる。

このように、昔の人々は「月」「花」とともに、「鳥」を見て「暦」にしたのである。

鳥類は生理学的には、「気温」ではなく「日長」を、生物としての暦（年周期）、つまり体内時計にしている。気温は年によって、日によって変化するので不確実で、生物の生存にとつては命とりになりかねない、ある日が暖かいからといって、翌日には急に温度が下がることもあるからである。だが「日長」、つまり太陽が地上に出ている時間の長さ、は地球の公転に基づいているため、毎年一定だ。

鳥たちはもつとも餌の豊富な時期にヒナを育てる。このために毎年、その時期に合わせて鳥の体内で性腺が大きくなる必要があるし、繁殖が終わると、その後の渡りの前に「換羽」、つまり全身の羽毛が生え変わらなければならない。

鳥の体内でこの生理機能をコントロールしているのは、各種のホルモンである。その中枢になつている脳下垂体の指示に従って、各ホルモンの量の分泌が調整されている。そのバランスによって、鳥の生理上の変化、形態や行動の変化が起こる。

この時、その指標にしているのが太陽が地上に出ている時間の長さ、

すなわち「日長」であり、それが視床下部を通じて鳥の脳下垂体に伝達される。神経伝導は電気的な信号によるので瞬時に伝達され、即時に反応が現れるが、ホルモンは液体なので時間経過が必要で、その分泌量や蓄積によって「時計」とすることができる。

人間の暦は天体の運行を計算して作られてきた。が、先に述べたように、人々の日常的な感覚には、日の長さより夜間に見る月の満ち欠けと位置の方が明確で、しかもそれが潮の満ち引きとも一致していることが当時の生活から容易にわかったので、多くの国の暦法ではもともと月齢を元にしてきた。

日本でも近世には月の満ち欠けをもとに計算し、それと太陽の一年間の動きとのズレを「うるう月」で調整する太陰太陽暦を使ってきた。この暦によって示された啓蟄、穀雨、芒種などの二十四節気は、季節ごとの生き物や農作物の成長と密接な関連があり、日本人はその季節ごとの「花」「鳥」を愛で、「風」すなわち風雅を感じてきた。「花鳥風月」はこのようにして、<sup>(5)</sup>季節と生き物の周期性から導かれる美意識として培われたと言えるだろう。

（奥野卓司「鳥と人間の文化誌」による）

〔注〕潮汐——月および太陽の引力によって起こる海面の周期的昇降。

野分——台風。また、広く秋から初冬にかけて吹く強い風。

折口信夫——日本の民俗学者、国文学者、国語学者、歌人。

アニメイズム——呪術・宗教の原初的形態の一つ。



〔問1〕<sup>(1)</sup> その意味での「花鳥風月」とあるが、どのようなことか。最も適切なものを次のうちより選べ。

- ア 茶道の具体的な理念としての「花鳥風月」。
- イ ワビ、サビ的なものとしての「花鳥風月」。
- ウ 「遊興」のイメージが表れた「花鳥風月」。
- エ 江戸時代に変質をとげた「花鳥風月」。

〔問2〕<sup>(2)</sup> これを「遊興」に転換したのが「風」だろう。とあるが、この意味の「風」が用いられている言葉として、最も適切なものを次のうちより選べ。

- ア 風刺      イ 風雲
- ウ 風化      エ 風格

〔問3〕<sup>(3)</sup> 別れを恨んでは鳥にも心を驚かすとあるが、筆者の考えをふまえるとこの部分からはどのような気持ちを読み取れるか。最も適切なものを次のうちより選べ。

- ア 尊い知らせであつても、とても聞く気分にはならない。
- イ 悲しくしていても、やはり美しいものには心が晴れる。
- ウ 離れているので、恋する人の便りを心待ちにしている。
- エ とてもつらい経験をしたので、神の導きに頼りたい。

〔問4〕<sup>(4)</sup> 移ろうがゆえに美しいという心情とあるが、こうした思いでとらえたものを、本文の「徒然草」の引用部分から二十字以内で抜き出せ。

〔問5〕<sup>(5)</sup> 季節と生き物の周期性から導かれる美意識とあるが、どういうことか。その説明として最も適切なものを次のうちより選べ。

- ア 四季折々の風物が移り変わっていくと、日本人は特定の景観に美を感じるということ。
- イ 花や鳥を愛するという日本人だけが持つ行為を通じて、美を感じるということ。
- ウ 太陽や月の動きに応じた季節や生き物の変化から、日本人は美を感じるということ。
- エ 日本人は太陽が地上に出ている時間の長さや、月の満ち欠けに対して美を感じるということ。